

## 平城京左京二条二坊五坪（平城宮第198次B区）発掘調査現地説明会資料

1989年5月6日（土）

奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部

調査地 奈良市法華寺町

調査面積 1000㎡

小池伸彦、森 公章

## 1. はじめに

そごうデパート建設予定地に関連する発掘調査は、1986年10月以来2年6か月、9次にわたり実施してきた。これまでの総調査面積は30000㎡にのぼり、平城京左京三條二坊七坪の大部分と一・二・八坪の一部について調査を終えている。その結果、この4つの坪が奈良時代を通じてどのような変遷を遂げたかが明らかとなった。それによると、ここは奈良時代前半には、4町を占める広大な宅地として使用され、出土した木簡から長屋王邸跡であることが判明した。また、空前の発見となった長屋王家木簡は、総数30000点に及ぶと推計され、これまで明らかでなかった高級貴族の暮らしぶりをうかがうことのできる貴重な史料である。その他にも、平城京内では最大の面積をもつ建物や最長級の建物の検出、四面廂付の建物を主殿とする双堂形式の建物の発見、日本で最古の猿の墨画土器の出土、奈良時代の漆器としてはあまり例のない大型の漆器浅鉢の出土、いわゆる二条大路南側溝からは質、量ともに長屋王家木簡に匹敵しうる木簡が発見されるなど、平城京を考えるうえで重要な知見をもたらしつつある。

今回の調査は、そごうデパートへ通じる奈良市市道建設にともなうもので、これまでの一連の調査のしめくりにあたる。このあと長屋王家木簡出土溝の一部といわゆる南側溝の一部の補足調査をまって、そごうデパート関連の調査を全て終了する予定であり、今回がその最後の現地説明会となる。しかしながら、建設工事の日程の都合により、調査半ばでの説明会開催を余儀なくされており、調査の途中経過報告となることをあらかじめお断りしておきたい。

## 2. 調査の概要

今回の調査区は、平城京左京二条二坊五坪の東南隅、二条大路と東二坊坊間路の交差点付近にあたる。このあたりは、平城宮東院南方遺跡として注目され、平城宮と平城京の関連を解明するうえで、また、平城京の条坊を復元するうえで極めて重要な遺跡である。

今回の調査でとくに注目されるのは次の3点である。ひとつは、平城京内において最長クラスに属する南北棟建物が見つかり、坪内での建物の配置からすると、ここが普通の宅地ではないことがうかがえ、この坪の、ひいては平城宮東院南方遺跡の性格を考えるうえで重要である。次に、いわゆる南側溝出土の木簡と共通する内容をもつ木簡を出土する溝（東西大溝）が見つかり、南側溝と共通する性格の溝であることが判明した。そして、二条大路北側溝では、平城京では初めての出土例である「瑞雲双鸞八花鏡」が見つかった。

これまでに検出した遺構は、掘立柱建物6棟、溝8条以上、井戸1基、築地、二条大路、東二坊坊間路、橋などである。これらは、奈良時代のもので、建物の重複関係や配置からA～D期の4期に区分できるが、各遺構の所属時期はなお十分には確定できていない。

## A期（奈良時代前半）

**建物1** 1以上×1間の東西棟。桁行10尺（3m）等間、梁間8尺（2.4m）。

**建物2** 二面ないし四面廂をもつ大型の東西棟の東妻。梁間8尺等間。

**建物3** 3×3間の南北棟。桁行6尺等間、梁間5尺等間。

## B期（奈良時代後半）

**建物4** 17以上×4間の南北棟。桁行8尺等間、梁間は身舎・廂とも10尺等間。6間ごとに間仕切りをもち、少なくとも3つの部屋に分けられている。総長136尺（40.8m）以上あり、京内では長屋王邸内の16×3間の東西棟建物に匹敵する、最長クラスの建物である。

**雨落溝8・9** 建物4の西側雨落溝9は、はじめ築地雨落溝7にそそいでいたが、築地雨落溝が8につけかえられたため、9を南に延長したと考えられる。

## C期（奈良時代後半）

**建物5** 桁行4間以上の東西棟建物の南廂。桁行9尺等間、廂の出は8尺。

## D期（奈良時代末）

**建物6** 8間×3間以上の南北棟建物。桁行7尺等間、廂の出8尺、身舎の梁間9尺。東西に廂がつくと考えられる。

## A～D期（未確定のものを含む）

**築地** 基底部分のみをとどめ、その幅は約3mである。築地心は、宮の南面大垣心から8.9m（30小尺、25大尺）南に位置する。北側雨落溝上には多量の瓦が堆積していた。これらの瓦は築地から落下したもので、宮の瓦とは異なり、京の瓦の傾向に近いが、長屋王邸のものとも異なる。

**二条大路北側溝** 今回検出した溝は、その位置や規模、左京二条二坊十二坪（奈良市水道局庁舎建設地）の調査成果などから見て、二条大路北側溝とみてまちがいない。この溝は3時期に区分できる。時期により異なるが、幅3m前後、深さ約70cmある。新しい時期のものは東二坊坊間路上に流路がのびていることが確認できたが、古い2時期の溝についてはまだ確定できていない。

**東二坊坊間路西側溝** 二条大路北側溝（以下北側溝という）より北側では、幅1m、深さ1mあり、北側溝と交差する付近では長さ50～60cmの石で護岸している。北側溝より南では、幅2m、深さ1mある。北側とは異なり、ある段階で埋め立てられており、側溝として機能していない時期があった。ただし、それがいつ頃なのかは今のところ確定していない。最も新しい段階では、西側溝と北側溝とは逆T字形に交差していたことが確かめられている。

東西大溝

・左京職進 鶏一隻 馬穴三村  
雀二隻 鼠一十六頭

200・37・5

・天平八年四月十四日  
從六位上行少進勳三等百濟王「全福」

241・(22)・4

・左京職進 鼠貳拾壹隻

・天平八年七月廿二日從七位下行大屬勳十二等膳造「石別」

・出拳錢數 古斐 卅七文  
美濃 卅七文  
若佐 五文

145・48・4

・沙美 五文  
魚麻呂 四文  
合六十二文  
天平五年二月九日

西側溝

泉坊進上覆盆子  
天平十九年五月十四日桑原新万呂

167・24・3

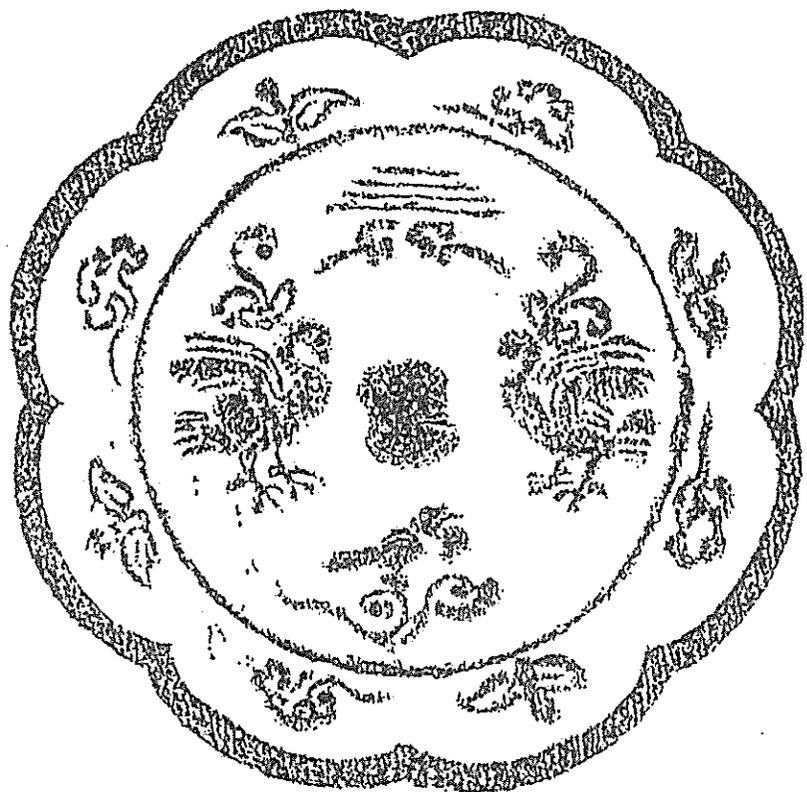
東西大溝 幅約2m、深さ約1mあり、東は西側溝の手前約0.5mの所とぎれる。その状況は、193次・197次・200次調査で検出したいわゆる南側溝と同様であり、さらに、埋土・溝の断面形・出土する木簡の内容など共通する点が多いことから、このふたつの溝は同じ性格のものであることが明らかとなった。東西大溝は、今回北側溝とはいえないことが明確となり、したがって、いわゆる南側溝もその名称をあらためるべきであろう。なお、溝の性格そのものについては不明のままである。

3. 出土遺物について

ずいぶんそうらんはつかるよう

瑞雲双鸞八花鏡 北側溝の埋土上層より出土した。唐式鏡とよばれる奈良時代の銅鏡で、唐から輸入した鏡をもとにして日本で製作されたもの。直径は11.5cm、重さ220.4gである。これと同じ鏡はこれまでに全国で15面知られ、奈良県内では明日香村坂田寺出土の1面、五条市靈安寺出土の2面がある。平城京からの出土は初めてである。

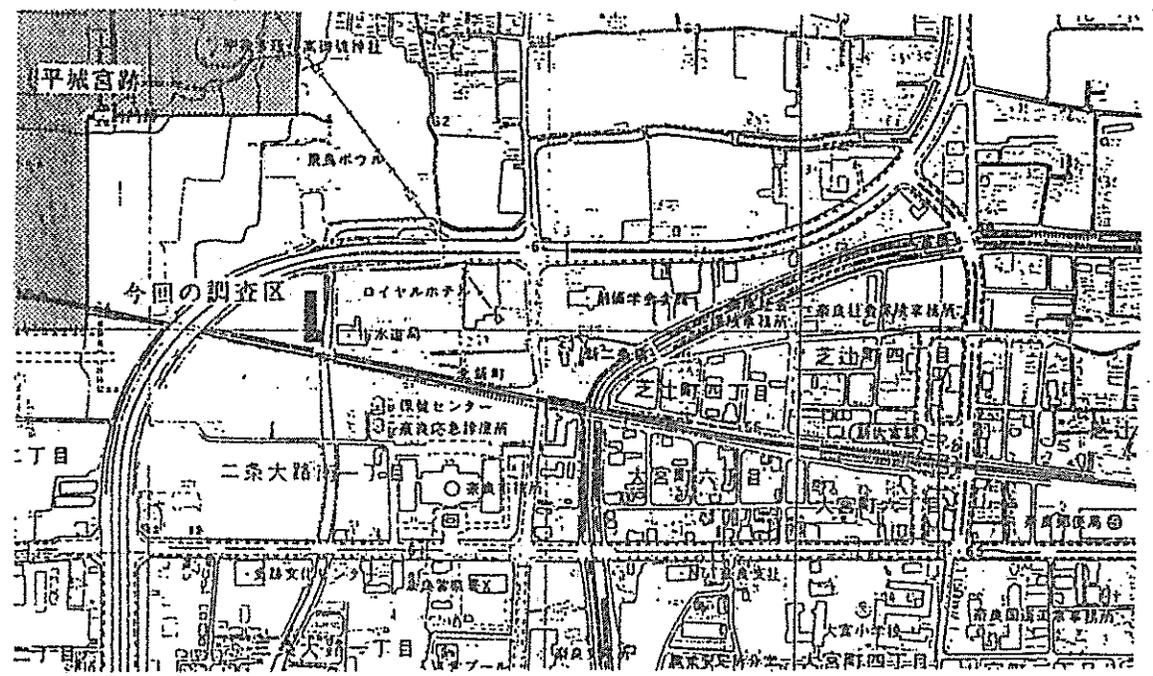
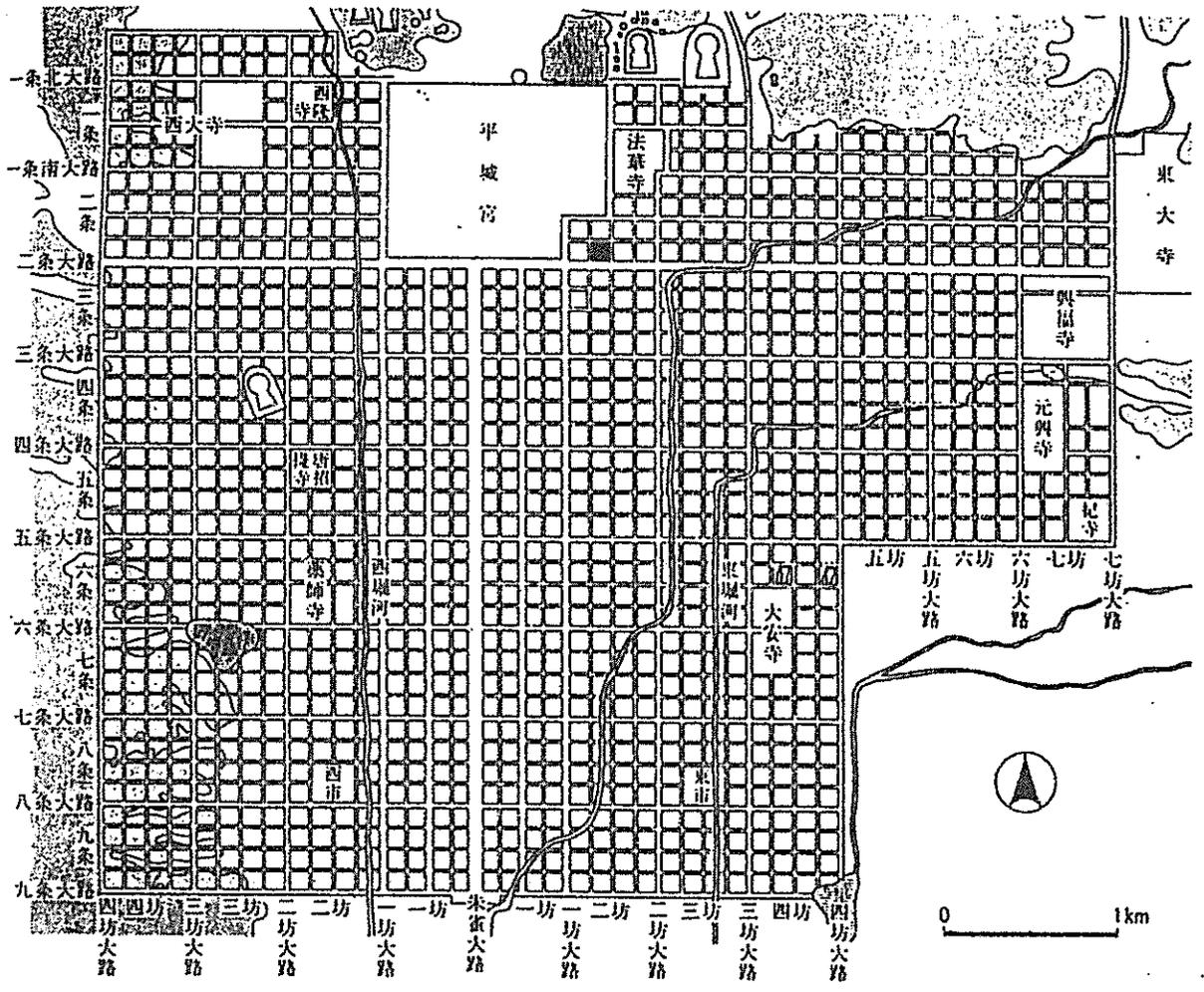
木簡 調査範囲が限られており、また調査の途中でもあることから出土点数は少ないが、注目されるものがいくつか見つかっている。そのうち、「石別」という人名のかかれた木簡はいわゆる南側溝（200次調査）でも出土しており、このことから今回見つけた東西大溝といゆる南側溝とが同じ性格のものであることが判明した。



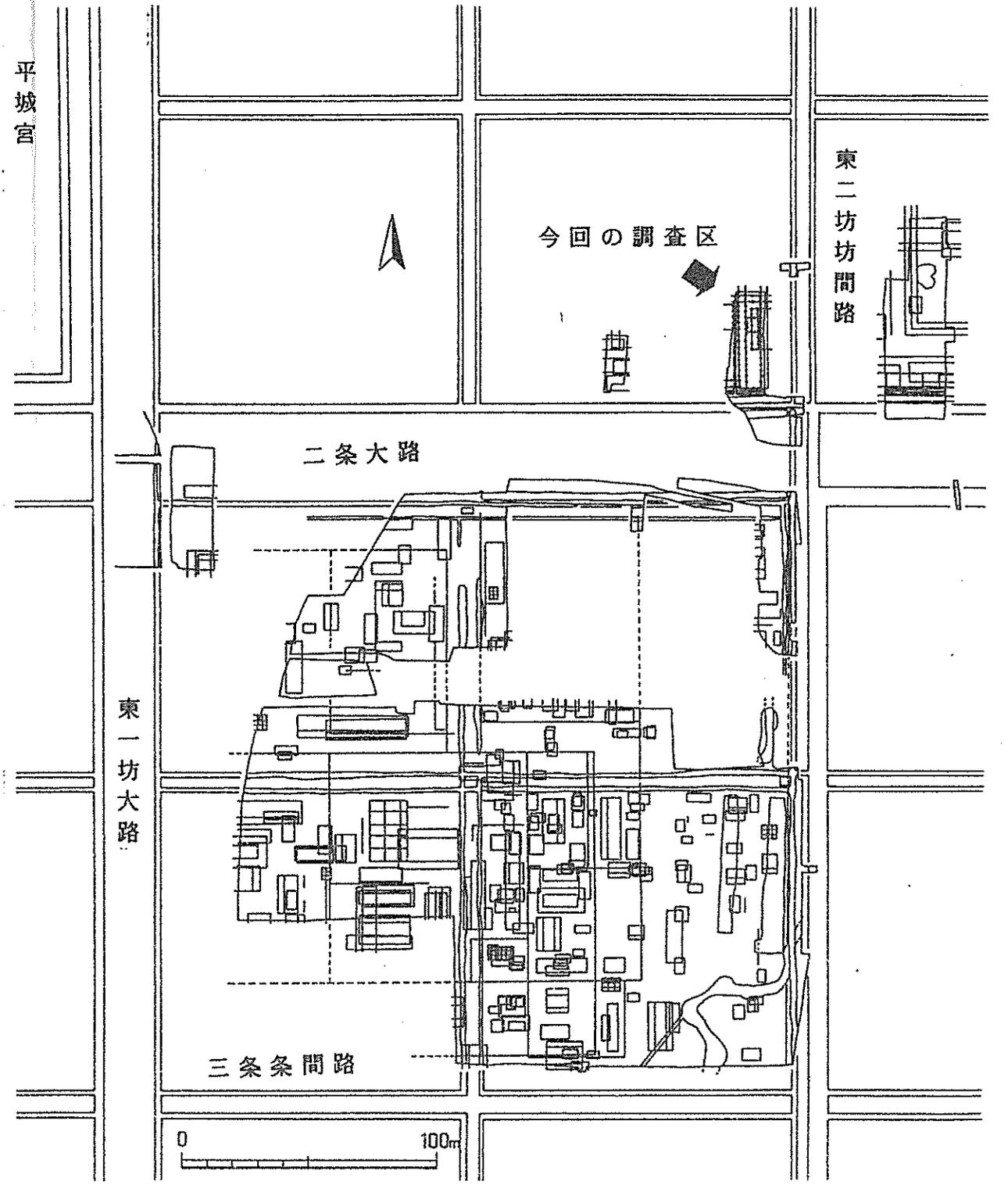
瑞雲双鸞八花鏡

(参考)  
二〇〇次 二条大路南側溝出土木簡

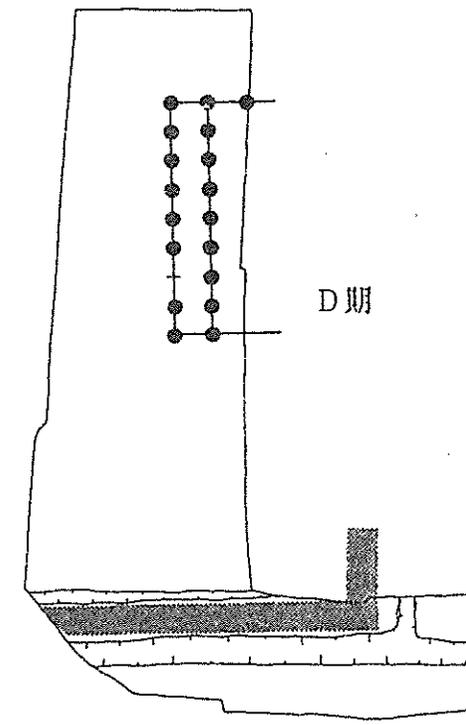
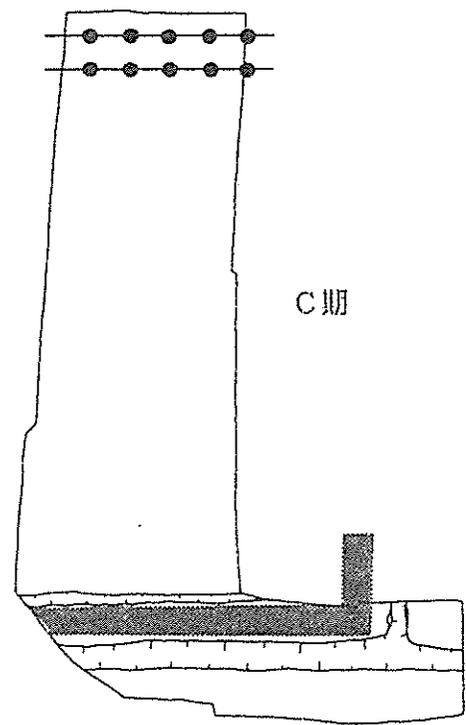
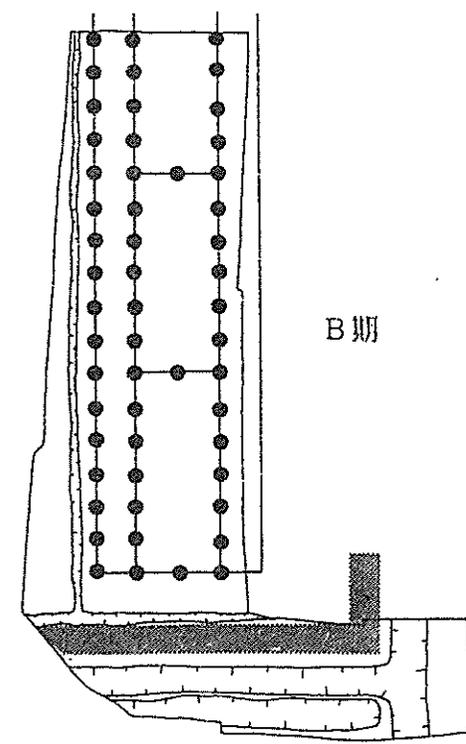
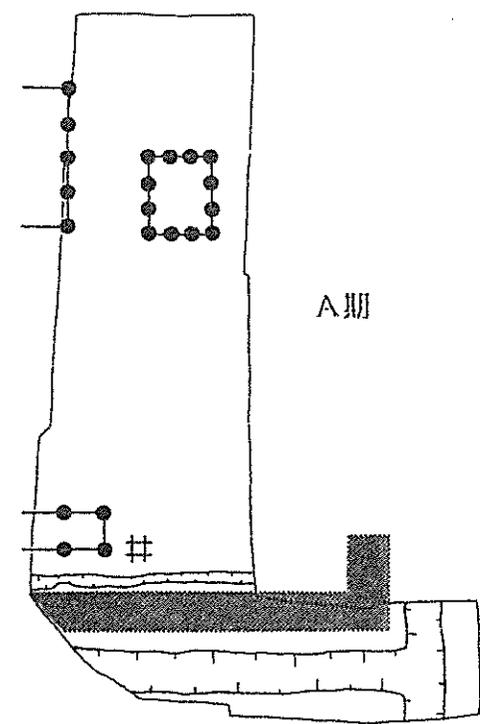
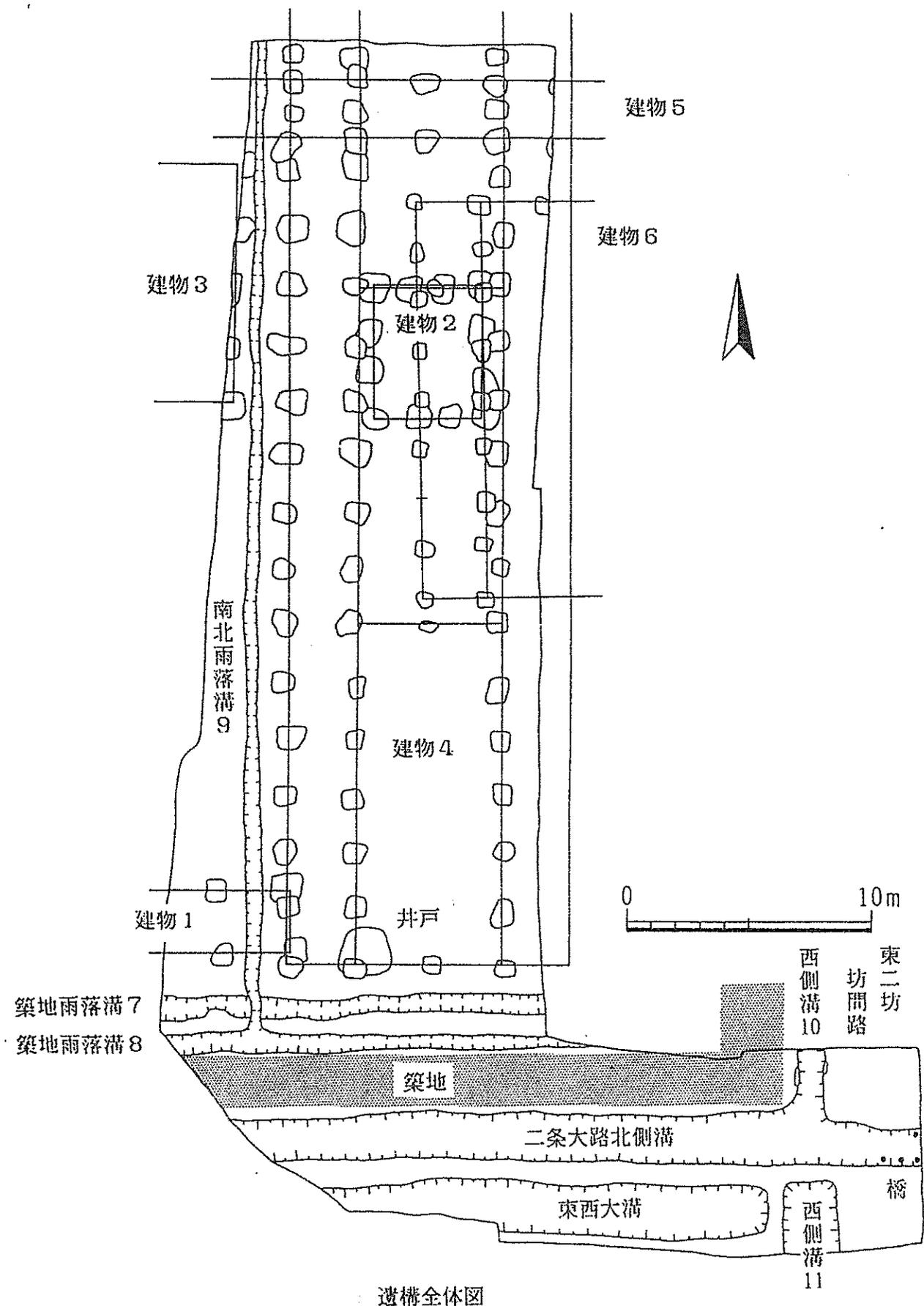
〔〕年四月廿六日從七位下行大屬勳十二等膳造石別



調査区の位置



周辺の調査状況



遺構変遷図